

早期発見の必要性説く

徳島大で県民がんフォーラム

県民がんフォーラム（県

かけた。

がん診療連携協議会など主催、徳島大学病院がん診療連携センター、徳島新聞社共催）が2日、徳島市の徳島大蔵本キャンパス大塚講堂であった。医師ら7人の講演に約350人が耳を傾けた。

協議会の荻野広和会長は、国の第4期がん対策推進計画（2023～28年度）において「がん予防」が柱の一つとされていると紹介し、生活習慣の改善や早期発見、治療の必要性を説いた。一方で、真偽不明の情報もあふれているとして「科学的根拠に基づいた予防、検診、治療を」と呼び

おおた在宅クリニック（徳島市）の太田敦院長は「がんは残された時間が現実的に分かる病気」だと説明。治る見込みがなくなつた時に家で最期を過ごしたい人は多いが、急変時の対応や介護などに対して家族の不安が大きく、実現がかなわない場合があると分析し、「多職種が皆で患者、家族を支えることが大切だ」と強調した。

このほか、患者ごとに遺伝子を検査し最適な治療薬の選択につなげるゲノム医療や、手術支援ロボットを用いて患者の負担を小さくする手術技術、がんの痛みを和らげる医療用麻薬などに関する講演があった。

（北村里沙）